ラブライブ！サンシャイン！！　～弱気な学生と9つの光～

ゆっくりゆうき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家庭の事情で東京から内浦に住むことになった一人の高校生は、普段は何でもできる高校生。しかしメンタルが弱く少しでも緊張してしまうとすぐ心が折れてしまう高校生が最後の大会で優勝を狙う。そして廃校を阻止するためラブライブ優勝をめざすＡｑｏｕｒｓ

この二つの目標を達成するために１人と９人がお互いのことを支えあっていく。

主人公・・・蒼紫雄紀（あおしゆうき）

普段は誰とでも話すし、運動もできる。しかし緊張してしまうと何もできなくなってしまう。

できるだけアニメと同じようにストーリーは進めていくつもりですが、アニメ2期のラストは廃校になってしまうのですが私のストーリーでは廃校にはさせません。勝手に話を変えてしまって申し訳ありません。まずそこまで続くか心配ですが。頑張ります

ヒロインは国木田花丸ちゃんにしようと思ってます。理由は好きだからです！

こんな作品を読んでくれる人がいるかわかりませんが、文章がおかしいところが多々あります。語彙力がないってことです。許してください。お願いします

投稿は自分の勝手な事情により不定期です。（バイトとか、バイトとか、バイトとか）

そしてもしこの作品を読んでくれる方がいましたら読んだ後に感想などをメッセージでもらえるとうれしいです。しかしこの作品の主人公もですがメンタルがものすごく弱いので暴言だけはやめてください。おねがいします。

あとこの作品が初めて出す作品です。

目次

新しい学校生活とお姉ちゃんたち
1
お姉ちゃんと初恋相手 ―― 5
初恋相手と同級生 ―― 11
同級生と初の部活動 ―― 16
練習後とミニデート？ ―― 23
東京での出来事と悔しい気持ち ―― 31
Ａｑｏｕｒｓのみんなと王様ゲーム
35
第８話 ―― 44
悔しい気持ちとこれから ―― 48
これからの目標 ―― 55
夏のお手伝い ―― 62
夏のお手伝い２ ―― 67
お泊まり会１ ―― 73
お泊まり会その２ ―― 77

新しい学校生活とお姉ちゃんたち

突然ですが今僕は引っ越すために自分の部屋の荷物をまとめています。なぜこんなことをしてるかって？

さかのぼること数時間前、両親からこんなことを言われた。

「雄紀、お前は今度から沼津の高校にいきなさい。でもお父さんたちは仕事で忙しいから沼津には一人で行ってくれ。」

「えっ？東京の高校に入学したばっかりだよ!?友達だってやっと一人作れたのに」

唐突に何を言い出すんだと思った自分。しかも一人で行けなんて、お金とか住むところとかどうするんだと言おうとしたとき、

「あっ、住むところとかお金に関してはもうすべて用意してあるから安心しろ。」

もう準備してあるのかよ。うん？学校は？どこになるの？

「あと学校は女子高だけど人数が少なくて共学のためのテスト生として入学することになったから。」

まじか、

「でもいいんじゃないか？内浦にいたときに遊んでた花丸ちゃんと果南ちゃんがいるん

だから」ニヤニヤ
「それはうれしいけどさ。」
「だったらいいじゃないか、ってことで今週の水曜日に行くことになってるから。家の場所はまたあとで。」
ってな感じで今自分は内浦に行くための準備をしてるってわけです。
そして水曜日になって親にあいさつをしてから家をでて電車やバスを使って家がある内浦までやってきた。
「ここが新しい家か結構広いな、てか俺一人にこんな大きな家いるか?」
一人で住むにしては大きすぎる家の中に入り、すでに届いている自分の荷物をあけて暮らせるように準備をしていたとき、突然家のインターホンが鳴った。
「ん?何だろう」
扉を開けると宅配業者の人がいた。
「こんにちは、お届け物です。えーっと小原さんからですね。」
「ありがとうございます。」
そういって荷物を受け取り、開けてみた。そしたら一通の手紙と制服が入っていた。
「これが新しい学校の制服、こっちは手紙?開けてみるか」
そういって開けてみると中には

「制服をきて１７時までに浦の星女学院の理事長室まできてください。　小原鞠莉」
もしかして鞠莉お姉ちゃん？
「とりあえず場所の確認も兼ねて行ってみるか。えっと今の時間は」
スマホの時間は１５時５０分となっていた。
「場所もわからないから早めに出ておくか。」
そういって新しく来た制服を着て財布やスマホをもって家を出た。学校に向かう途中に何度か女子高生とすれ違った。
「さっきからすれ違うのが俺が行く学校の生徒か。ん？あのオレンジの髪の女の子前に会ってるような」
すれ違ったオレンジ色の髪の生徒を見て思い出そうとしたが東京で住む前のことだったのであまり覚えていなかった。しかし、、
「雄紀くん？」
「千歌ちゃんどうしたの？」
「いやさっき雄紀くんとすれ違ったような」
「雄紀くん？千歌ちゃんのお友達？」
「そっか梨子ちゃんは知らないんだ、小さい頃千歌ちゃんと私と３人で遊んでたんだ！」
「でも千歌ちゃん、雄紀は今東京にいるはずだから多分違う人じゃないかな」

「そっかぁ、でももう一回会いたいなぁ。」
　そのころ雄紀は、
「着いたけど、どうしようかな。このまま入ったら怒られそうだし」
　すると
「おひさしぶりですわ、雄紀さん」
「もしかして、ダイヤお姉ちゃん？」
「9年ぶりですわね。またお会いできてうれしいですわ」
「自分も会えてうれしいですよ、もしかしてこの学校にかよってるんですか？。」
「そうですわね、この学校の生徒会長をやっていますわ。あと鞠莉さんはこの学校の理事長をやっておりますわ」
「なるほど、やっぱりあの手紙は鞠莉お姉ちゃんからだったんだ。」
「その通りデース！」
　あっ、この声は
「お久しぶりね！雄紀！」
　そこには鞠莉お姉ちゃんが理事長室ではなく、俺の背後にいた。

お姉ちゃんと初恋相手

「お久しぶりね！雄紀！」
　そういって鞠莉は後ろから抱き付いてきた
「当たってる！柔らかいの当たってるから！」
「もちろん当ててるのよ！前よりも大きくなったでしょ？」
「鞠莉さん？いったいなにをやってるのかしら？」
　そこには怒ってるダイヤお姉ちゃんがいた
「スキンシップに決まってるじゃない！」
「だからって抱き付く必要はありませんわ！」
　そういってダイヤお姉ちゃんは抱き付いている鞠莉おねえちゃんを離してくれた
「鞠莉さん、今日の目的を忘れてませんか？」
「忘れてないわよ？、ここで話すより理事長室で話しましょ？」
「わかりました。」
　そういって三人は理事長室に向かった。最初から理事長室でよかったのではないかと思ったのは自分だけではないと思う

「それで今回呼んだのは学校の説明もありますがもうひとつ、あなたには今活動中のスクールアイドル部のマネージャーとして参加してほしいのデス！」
「いいですけど、自分も沼津の柔道場で練習したいので、だから参加できるのは練習の無い日くらいしかできないんですけどそれでもいいなら。」
「それでもいいわよ？」
「ならいいですよ。」
「なんか決まるの早すぎではありませんか!?なんかもっと言い合うようなイメージがあったのですが!?」
　ダイヤお姉ちゃんが大きな声で急に話してきた
「だってめんｄ」
「それ以上はブッブーですわ!!」
「なら休みの日決まったら教えてもらえる？決まったらダイヤか私に連絡ちょうだい？」
「わかりました。」
「スルーですか!?」
「まぁまぁ」
　ダイヤお姉ちゃんが少しうるさかったが俺は鞠莉さんとダイヤさんと連絡を交換し

た。
「ふぅ、とりあえず明日になったら道場にいってそのあとは、、本屋にでも行って小説でも見てこようか。」
　そして俺はご飯を食べ、少し体を動かしてからお風呂を済ませ布団に入り寝ることにした。そして朝になって
「んっ?まだ5時か、どうしよ1回起きちゃうと寝れないし、外でも走ってくるか。」
　そういって走りやすい服に着替えて外に出た。
「よーし走るか、とりあえず軽めに走ろう」
　そういって２０分ほど走っていたその時だった
「あれ?もしかして果南お姉ちゃん?」
　そこには休憩している果南おねえちゃんがいた。
「えっ?もしかして、雄紀?」
「やっぱり果南お姉ちゃ、ん!?」
　急に抱き付かれお姉ちゃんと言い切れなかった。果南お姉ちゃんが落ち着いたのは抱き付いてから5分ほどたった後だった。
「いつ帰ってきたの?」
「昨日かなぁ。昨日は鞠莉お姉ちゃんとダイヤお姉ちゃんに学校に呼ばれて会ってたか

ら。」
　そうするとなぜか果南お姉ちゃんが不機嫌になっていた
「ふーん、先に鞠莉とダイヤと会ってたんだ。」
「な、なんでそんな不機嫌なの？」
「しーらない」
「えーっ」
「、、、ハグしてくれたら許してあげる」
「わかったよ」
　そういって果南お姉ちゃんにハグした
「ありがと！」
「どういたしまして」
「どうして鞠莉とダイヤに呼ばれたの？」
「学校の説明とスクールアイドル部のマネージャーやれっていわれた」
「、、、鞠莉はまだあきらめてないんだ。」
「ん？なんか言った？」
「なんでもないよ？それより学校の説明ってなんで？」
「俺も浦の星女学院に行くから。共学のテスト生として」

「えっ？そうなの!?」
「うん」
「そ、そうなんだ　私ももうすぐ学校に行くようになるからよろしくね？」
「わかった。じゃあそろそろ家に帰るね。」
「はーい。じゃあまたね」
　そういって果南お姉ちゃんと別れて家に帰った。
「お風呂にはいってからご飯食べてそのあとに道場にいくかぁ。」
　家を出て沼津に向かい道場に所属？するための手続きをした。
「さて、やることはやったし本屋にでも向かおうかな。」
　道場での説明などで時間は4時を過ぎていた。
「結構大きい本屋さんだな」
　小説の新刊がでているか確認しにいくと大量の本を運んでいる女の子がいた。
　すごいなぁと思っているとその女の子と目が合った。すると
「もしかして、雄紀くん？」
「えっ？」
「花丸だよ！小さいころ遊んだ！」
「もしかして国木田花丸？」

「そうだよ！」

目の前にはずっと好きだった彼女、国木田花丸がいた

初恋相手と同級生

「花丸だよ！小さい頃遊んだ！」
「もしかして花丸？」
「そうだよ！」
　目の前にはずっと好きだった彼女、国木田花丸がいた
「覚えてる？マルのこと」
「うん、覚えてるよ。ただ前とは全然違くてわからなかっただけ。」
「よかったぁ、てっきり忘れてるのかとおもったずら」
「語尾のずらっていうのだけでも花丸ってわかるよ」
「なんかバカにされた気がするずら」
「気のせいだよ」
　それにしても昔とは全然違うなぁ。胸とか
「なんかさっきから胸しか見てないような気がするずら」
「みてないよ！」
　ごめんなさい。見てました

「もしかしてスケベずら？」
「ちがうから！」
「何してるの？花丸ちゃん」
「ん？もしかしてルビィちゃん？」
「あっ！雄紀お兄ちゃんだ！」
「お久しぶりだね」
「うん！」
「ルビィちゃん雄紀くんのこと知ってるの？」
「小さい頃お姉ちゃんと一緒に遊んだんだ！」
「そう、なんだ」
　てっきりマルしか雄紀くんのこと知ってないと思ってたのにまさかルビィちゃんが知ってるなんて予想外ずら
「どうしたの？花丸ちゃん」
「なんでもないよ？」
「それでなんで雄紀くんはここに？」
「ちょっと小説を見に来ただけだよ」
「なんの小説？」

「ラノベをちょっとね」
「マルはラノベ見たことないからよくわからないずら」
「ルビィも見ないから」
「だよねー」
「そろそろ俺は帰るよ」
「わかったずら」
「じゃあね」
　そういって俺は本屋を後にした
「とりあえず鞠莉お姉ちゃんに休みの連絡してっと」
　家に帰り晩御飯に何を作ろうか迷っているとインターホンが鳴った。
「はーい」
「こんばんは、雄紀」
「果南お姉ちゃん？どうしたの？」
「いやー、家でご飯作ったんだけど余っちゃってさ、もうご飯食べた？」
「まだだよ、ちょうど今からおかず作ろうと思ってたところだよ。」
「じゃあちょうどいいや、私が作ったんだけどこのおかず食べてよ。口に合うかわからないけど、このまま捨てるのももったいないし」

「ありがとう果南お姉ちゃん。よかったら家に寄ってく？」
「寄っていきたいけど今日は遠慮しておくよ。」
「わかったよ。」
「そういえば雄紀は明日から学校いくの？」
「そうだね、明日から行くよ。」
「そっか、私も明日から学校に行くと思うから。学校であったらよろしくね。」
「うん、今日はありがとうね。おやすみ果南お姉ちゃん」
「おやすみ」
　果南お姉ちゃんが帰った後もらったおかずを温めて食べました。ものすごくおいしかったです。食べた後はいつものようにトレーニングをしてからお風呂を済ませ寝ることにしました。
「よし、忘れ物は無し、学校に行くか。」
　学校に行き職員室に行くと自分のクラスの担任から説明を受けた。そして教室まで行き担任に呼ばれたので教室に入り自己紹介をした。
「今日からテスト生としてきました。蒼紫雄紀です。よろしくお願いします。」
「じゃあ席は千歌さんの後ろで」
　ん？千歌？

言われた席の方を見ると目をキラキラさせている高海千歌と渡辺曜、そしてずっとこちらを見ている桜内梨子がいた。

同級生と初の部活動

「今日からテスト生としてきました。蒼紫雄紀ですよろしくお願いします。」
「じゃあ雄紀君は千歌さんの席の後ろで、」
「はい」
　自分は言われた通りに自分の席についた。朝のホームルームが終わり一時間目の準備をしていると前の席の千歌さんから声をかけてきた。
　なんか見たことあるんだよなぁ灰色の髪の女の子も
「雄紀君だよね!?」
「そうだけど」
「覚えてない？小学校の時に私と曜ちゃんで遊んだでしょ？」
「もしかしてちーちゃん？」
「そうそう！」
「じゃあこっちは曜ちゃんか」
「名前覚えててくれたんだぁ。」
「さっきまで忘れてたけどね」

「それはひどいよ～」
　ちーちゃんと曜と話してると二人の後ろにいた、桜内さん?が
「あのー、この人が二人が言ってた幼馴染さん?」
「そうだよ!」
「そうなんだぁ、初めまして桜内梨子です。よろしくね」
「初めまして、蒼紫雄紀です。よろしくお願いしますね」
　そうこうしているうちに一時間目のチャイムが鳴った。
　そして昼休み、
「雄紀君一緒にご飯たべよー!」
　ちーちゃんと曜、そしてその後ろに梨子がいた。
「いいよー」
　すると
　ピンポーンパンポーン
「二年生、蒼紫雄紀、至急理事長室まで」
「「「あっ」」」
「あはは、いってきます。」
「悪い事でもしたんじゃないの～?」

「してないよー」
　とりあえず理事長室にいくかぁ
「失礼しま～す」
「ごめんなさいね急に呼んじゃって。」
「大丈夫だよ、鞠莉お姉ちゃん。それでどうしたの？」
「今日の部活のことよ。今日は練習ないんでしょ？」
「ないよ。」
　前に鞠莉お姉ちゃんには休みの日を教えているので大丈夫なはず
「ならよかったわ！じゃあさっそく今日の放課後にスクールアイドル部にいってみて！」
「あのさ、行くのはいいんだけどさ。」
「ん？どうしたの？もしかして鞠莉お姉ちゃんがいないと不安？」
「違うよ。」
「Ｏｈ～ちょっと残念」
「スクールアイドル部って何人いるの？」
「今のところ６人デェス！」
　追記「千歌と曜と梨子のファーストライブは飛ばします！。ごめんなさい！この話で

は花丸とルビィちゃん、そして善子がすでにＡｑｏｕｒｓに入ってます」
「６人、誰とか聞いてもいいの？」
「それはヒ・ミ・ツ！」
「わかった。」
「今回はこれで終わりデェス。またなにかあったら呼ぶわね！」
「はーい。」
　そして理事長室を後にした。そして放課後、、
「ここが部室かぁ、、よし、、失礼しまーす」
「「「「えっ」」」」」
「えっ？」
　そこには着替えていた６人がいた。
「「「「「きゃーー！」」」」」
「ごめんなさーーい!!」

「それで、なぜここに来たのかな？」
　千歌が怒って聞いてきた。当たり前か

「いや、鞠莉お姉ちゃんからこの部活のマネージャーやれって」
「鞠莉お姉ちゃん？もしかして鞠莉ちゃんのこと？」
「うん」
「もしかして鞠莉ちゃんが言ってたマネージャーって雄紀君のこと!?」
「多分、そうだと思う」
「そうだったんだー」
「うん、あと本当にすいませんでした。ノックもせずにはいってしまって」
「まぁノックしないのは悪いけどこっちも鍵閉めてなかったからね。」
　そのあと、部員全員に謝罪しどうにかゆるしてもらった。
「とりあえず一人ずつ自己紹介しよっか」
　千歌がそういうと自己紹介をしてくれた
　最後の1人。津島善子だけは少し違う感じだったが。
「堕天使ヨハネ、降臨！」
「は、はい」
　こちらは津島善子ちゃんずら。ちょっと堕天使とか言っちゃうときがあるけどあまり気にしなくていいずら」
「善子いうな！、私はヨハネよ！」

「はいはい、わかったずら。でもこのままだとまた前みたく失敗しちゃうかもよ？」
「それは、いやだ、、」
「じゃあ我慢するずら」
「はい」
　花丸にはかなわないようだ。
「とりあえず自己紹介は終わったし、練習しに行こう！」
　千歌が先頭となってみんなが屋上に走って行った。
　するとちーちゃんが
「とりあえず雄紀君は私たちが踊ってるところを見て何か変なところがあったら言って？」
「ちーちゃん、何も考えてなかったでしょ？」
「あはは、ばれた？」
「バレバレだよ」
　そして6人の練習とそれを支えようとする一人の部活が始まった。しかし雄紀はなんか違和感を感じていた。
「なんで鞠莉お姉ちゃんはこんなに心配しているんだ？だったら自分が行けばいいのに。そして果南お姉ちゃんも変なこと言ってたし、ダイヤお姉ちゃんも鞠莉お姉ちゃん

と果南お姉ちゃんと何かありそうだし、」

もしかしたらまだこのチームは6人じゃ終わりじゃないんじゃ

練習後とミニデート？

　Ａｑｏｕｒｓの練習が終わりみんな解散した後、花丸が声をかけてきた。
「雄紀くん」
「ん？どうしたの？」
「あのー、明日なんだけどね？よかったらマルと一緒に沼津までいかない？時間があったらでいいんだけど。」
「明日？明日は柔道の練習があるんだ。午後からならでもいいなら大丈夫だけど」
「ならマルが朝から練習見に行ってもいい？」
「えっ？朝から？」
「ダメ、、かな」
「いや俺は全然いいけど、見てもあまり面白くないと思うよ？」
「大丈夫ずら！」
「わかった。じゃあ朝の７時ころに迎えに行くから。」
「了解ずら！」
　やった！雄紀君と二人でデート！しかも練習も見れるずら！

なんか花丸前より結構ぐいぐいくるような、気のせいか
そして二人は明日の約束をして別れた。
次の日の朝
「じゃあ迎えに行きますか、」
国木田家では
「もうそろそろで雄紀君が迎えに来る、、服とか大丈夫かな」
ピンポーン
「!!、はーい!」
「おはよう、花丸」
「おはよう、雄紀君」
なんか付き合ってるみたいずら、、
「ん?どうかした?」
「な、なんでもないずら!」
「ならいいけど、」
そして電車に揺られ二人は練習場についた。
「じゃあ花丸はちょっとまってて」

「わかった」
「失礼します。」
「おう、おはよう、早いじゃないか練習は9時半からだぞ。」
「ちょっと学校の友達が練習を見たいって」
「なんだ!?新しく入るのか!」
「いえ、ただ練習を見たいだけらしくて、女子なんですけどいいですか?」
「別に構わんぞ?」
「すいません、急に」
「それくらいなら全然大丈夫だ。それよりも彼女か?」
「違いますよ!ただの友達です!」
　そうして花丸の見学の許可をもらい花丸のところに戻った。
「見学大丈夫だってよ。」
「ありがとうずら〜、それにしてもほかの人はまだ来てないずら?」
「あーちょっと早めに来たからね。とりあえず着替えてくるよ。」
「わかったずら」
　数分後
「おまたせ、ってどうした。」

「いや、かっこよくて驚いただけずら」
「ありがとうね、練習までまだ一時間近くあるな。ちょっと背中押してくれない？」
「ん？ストレッチずら？」
「うん、少しでも体動かしときたくてね。」
「わかったずら」
　そうして花丸に押してもらいながらストレッチをしたり、腕立てや腹筋、背筋などを鍛えていると、
「おはようございまーす。おっ、また朝早くから一人でやってたのか。」
「はい、」
「てかお前彼女連れてきたのか？」
「え？」
「違いますよ、学校の友達です。練習を見てみたいってことで。」
「なんだ違うのか、」
　するとほかの人たちもぞろぞろとやってきた。そして練習が始まり、
「すごいずら、、雄紀君いろんな人をどんどん投げてるずら。」
「すごいでしょ、あいつは入ってきてすぐの練習でうちの団体メンバーの一人を投げたからね。でもデータを見ると少しおかしいんだよね。」

「ずら、、じゃなかった、なんでですか?」
「こんなに強いのに大会には出ていないんだ。学校が出してないのかなと思って問い合わせたけど出場回数ゼロ。本人はケガって言ってるけどそんなケガあるんだったら練習できてないしここまで強くなれないと思う。」
「なんででてないんだろう」
「まぁ今回は出てもらうけどな。」
「そうなんですか?」
「あぁ、ちょうどいいか、おいお前ら!一回集まってくれ!」
　すると
「今回の団体メンバーと個人メンバーを発表する。まず団体は、、」
　団体の発表が終わり、
「次に個人だが無差別で雄紀、お前を出すから」
「えっ?俺ですか、、」
　なんかいつもの雄紀くんとは違うような、なんか怖がってる?
「あぁ、お前だ。」
「わ、わかりました。」
「今回の発表はこれで終わりだ。あとは立ち技の乱取り4分の5本2セットで終わりだ

！ケガだけはするなよ！」

そうして3時間半の練習がおわった。

「終わった～」

「お疲れ様ずら、はいこれ」

すると花丸はスポーツドリンクを渡した。

「ありがと～」

「雄紀君、さっき発表されたとき少し変だったよ？」

「!?、大丈夫だよ、多分その時少し疲れてただけだよ。」

「ならいいけど」

「とりあえず本屋行こうか。」

「わかったずら、」

本屋につくと、

「それで？何がほしかったの？」

「これずら！」

彼女が持ってる本はμ，sの星空凛という女の子が表紙になっている雑誌だった。

「これ？」

「うん！」

「へぇ、これでいいの?」
「そうだよ?」
「買ってあげるからそれかして?」
「いいよ、自分で買うずら」
「いいからいいから、ほらはやく」
「わかったずら、、」
　そしてレジに持っていき買った本を花丸に渡した。
「はい、どうぞ」
「本当にいいずら?」
「うん」
「ありがとう〜」
「どういたしまして」
　本屋を後にすると
「あのさ、そろそろおなかがすいてきたからご飯食べない?」
「わかったずら、何食べるずら?」
「うーん、ん?あそこの定食屋さんは?」
「マルはどこでも大丈夫だよ?」

「じゃああそこにしよっか」
「了解ずら！」
そしてお昼ご飯を食べバスで内浦まで帰っていると、
「ずらっ!?」
「スー、スー」
そこには花丸の膝の上に頭をのせて寝ている雄紀の姿があった。
「びっくりしたずら、急に膝の上に頭のせてくるなんて。でも寝顔かわいいずら。」
すると花丸は親に不便だろうと新しく買ってもらったスマホで写真を撮った。その写真でＡｑｏｕｒｓのメンバーみんながうらやましがり雄紀が苦労するのはもう少し先のお話である。

東京での出来事と悔しい気持ち

　Ａｑｏｕｒｓがラブライブのため東京にいっている間雄紀は、
「さてと、今日はみんなが帰ってくる日か、とりあえず駅に迎えに行くか。」
　もうすでに結果は千歌から教えてもらっていた。そのとき千歌はしょうがないよと笑いながら話していたが、多分あれは強がっているだけだ。本当はものすごく悔しいんだと、思っていた。駅についてみんなを待っていると、
「あら、雄紀さんじゃないですか、」
「あれ？ダイヤお姉ちゃん？どうしてここに。」
「ルビィの迎えですわ」
「あー、なるほど。そろそろ来ると思うんですけど、、、あっ来た、おーい」
「あっ！雄紀くん！」
　するとみんなこっちに集まってくれた。
「どうだった？東京は。」
「すごかったよ、ステージもいつもよりキラキラしてて。」
「そっか、結果はもう千歌から聞いてるから俺はわかってるけど、結果はどうであれみん

な全力をつくしてきたんだろ？」
「うん、」
「まぁ今日はみんな早く家に帰って体を休めるように、」
「「「「はーい」」」」
　おれが話した後ダイヤさんは昔のことを自分たちに話してくれた。昔自分たちもスクールアイドルをやっていたこと。鞠莉お姉ちゃんがケガをしてしまったこと。ステージで歌えなかったこと。そのあとみんなは解散したが、
「千歌、今日少し家に来るか？」
「なんで？」
「ちょっと二人で話したいことあってな、」
「わかった。家に連絡するからちょっとまってて。」
「はいよ」
　そうして二人は雄紀の家に行った。
「おじゃましまーす」
「はい、いらっしゃい」
「でも突然どうしたの？もしかして変なことするつもりじゃ、、」
「大丈夫絶対しないから。」

「今お茶とお菓子とみかん持ってくるから」
「はーい」

「それで？話ってなに？」
「ちーちゃんは今回の結果みてさ、悔しくないの？」
「!?、そりゃあちょっとは悔しいけど私はよかったと思ってるよ。最高のパフォーマンスができてたし。」
「そっか、でも俺が思うにちーちゃんはなんか強がってるように見えるよ。チームのリーダーだからって強がらなくてもいいと思うよ。悔しくて泣きそうなら泣いてもいいし、我慢しなくてもいいんだよ。」
「悔しいよ、悔しくないわけないじゃん！だってゼロだったんだよ！あんなに頑張って練習して、歌詞も考えて、衣装も作って、みんなで力を合わせて頑張ってきたのに！、ゼロだったんだよ！」
「ようやく本音を言えたね。千歌ちゃん。」
「みんな、、」
「悪いな、みんなに来てもらってた。だって千歌はみんなの前だと我慢しそうだったからな。」

「千歌ちゃんはもっと本音をみんなにぶつけてきてもいいんだよ。」
「さてと、みんなおなかすかない？東京から帰ってきたお祝いとして俺が作ってたんだ。どんどん食べてくれ。足りなくなったら言ってくれれば作るから。」
この後に王様ゲームをしたがその話はまた次回に、

Ａｑｏｕｒｓのみんなと王様ゲーム

夕食を食べた後元気になった千歌が物凄い発言をした。
「明日休みだからこのまま雄紀君の家に泊まらない？」
にやにやした顔を雄紀に見せながら。
「ちょっとまっ「「「「賛成！」」」」」まじですか。」
みんな賛成とは、梨子さんくらいは反対すると思ったのに。
「でもみんなの親が許さないでしょ。」
「みんな親に確認済みです！」
なら、
「流石に誰か保護者みたいなのがいないとダメなんじゃ。」
ピンポーン
「こんな時間にだれだ？」
「雄紀～早苗お姉ちゃんが泊まりに来たよー。」
「なんで!?」
「いやー、ちょうど沼津まで出張があってね。泊まるとこないかなぁって思ってたら

さっき千歌ちゃんから電話きてみんなで雄紀の家でお泊まり会するから保護者としてこないかってねー。」

準備良すぎだろ。

「とりあえず入りなよ。」

「おじゃましまーす」

「まぁ保護者もいるし泊まるのもいいけど着替えとかは？」

「みんなで東京に行くのに準備してたのあるから大丈夫」

「わかった、お風呂は先入っていいからね。」

「「「「はーい」」」」

「お姉ちゃんご飯は？」

「くる前に食べたから大丈夫だよ。でもお酒のおつまみ欲しいなぁ。」

「はいはい」

そうしてみんながお風呂に入った後。

「王様ゲームしない？」

千歌からまた提案があった。

みんなはそれに賛成し、王様ゲームが始まった。

「よ～し、王様だーれだ！」

千歌がそういうとみんな一本ずつ割り箸を引いた。
「あっ、ルビィだ！」
ルビィちゃんなら変なお題は出さないだろう。
「じゃあ5番の人はルビィの頭撫でてください！」
「あっ私だ。」
梨子だった。ルビィは梨子に撫でてもらって満足そうな顔をしていた。
「じゃぁ次行こっか。王様だーれだ！」
「あっ千歌ちゃんだ」
曜がそういうと千歌は何を言おうか考えていた。
「よし！決めた！2番の人はわたしのほっぺにキスしてください！」
このとき千歌は男性は1人だからそう簡単に当たるとは思っていなかった。
「あっ、俺なんだけど。」
「えっ！」
「千歌ちゃんお題変えた方いいんじゃ。」
曜がそういうと
「このままでいい！」
千歌が即答した。予想外の事だけどせっかくのチャンス！頑張らなきゃ！

「本当にいいのか？」
「うん」
「チュッ」
「／／／／あ、ありがとう」
「どういたしまして」
「さ、さて！気を取り直してつぎいくよ！王様だーれだ！」
「私であります！」
　つぎは曜だった。
「じゃあ1番の人は後でわたしのコスプレのお手伝いになってもらいます！」
「わたし!?」
　選ばれたのは善子だった。
「よろしくね！善子ちゃん！」
「ヨハネよ！」
　そして次に当たったのは花丸だった。
「えへへ、やっとまるの出番ずら」
「ん？なんか花丸酔ってない？」
　いつもとちがうよね

「酔ってないずらよー、」
　そのセリフは酔ってる人がよく言うセリフだよ
「じゃあね、４番の人はだれずら？」
　このタイミングでおれが当たるのか。
「おれだよ。」
「そっかぁ、なら私にキスして欲しいずら！」
「、、はい？」
「だからキスして欲しいずら！」
「いやいや、おかしいでしょ。」
　まさか花丸からキスしろと言うなんて。
「さっき千歌ちゃんにはしてたずら、もしかしてまるのこと嫌い？」
「いや好き嫌いじゃなくてそういうのはちゃんとした相手とじゃないと、」
「ならまるからキスするからいいずら」
　そう言い、まるは雄紀のことを押し倒した。周りのみんなは驚きで動けなかった。
「ちょ、流石に悪ふざけが、「ふざけてないずらよ。まるは本気ずら」」
　その時花丸の目が本気で雄紀は何もできなかった。そのすきに花丸は
　んっ、

「えへへ～しちゃったずらね。」

　そう言って花丸は嬉しそうだったが、そのまま寝てしまった。

「酔うと花丸は怖いな。」

「でも雄紀くん嬉しそうに見えたけど？」

　そこには顔を少し赤くしたちーちゃんがいた。その後ろには他のみんなも

「えっ、、どうしたの？」

「いや？なぜ断らなかったのかなぁって」

「そうだよ！まったく、あそこはちゃんと断らなきゃ！」

「いや、あれは逃げれな、「だとしてもちゃんと言葉で断らなきゃ！」はい」

「とりあえず雄紀君は花丸ちゃんを部屋まで運んできて！」

　理不尽な、

「よいしょっと、とりあえず自分の部屋に運んで寝る時に起こせばいいか。」

　そして数時間後、

「だめだからね！襲ったりなんかしたら！」

「いやしないから！」

　そう言って残り5人は別な部屋で寝ることになった。

「なぜこうなった。」
　自分の部屋には花丸が１人、寝ていた。しかもこの部屋にはベットがひとつだけ
「はぁ、リビングで寝るか。」
「んっ？、雄紀君？」
「起こしちゃったか？」
「なんでまるここに」
「あー、とりあえず理由はＡｑｏｕｒｓのみんなに聞いてください。」
「？わかったずら、」
「とりあえず花丸はここで寝ててくれ。おれはリビングで寝るから。」
「まるがリビングでねるずら？」
「いいよ、おれが寝るから。」
　花丸が少し考えていると、
「だったら一緒にねるずら？」
「はい？」
「だから一緒にねるずら」
「いや、流石に」
「いいからねるずら」

「はい、」
「いい子ずら」
そうして一緒に寝ることになった。
「雄紀くんあったかいずら」
「そ、そうですか」
「おやすみ、雄紀くん。」
「おやすみ、花丸」
そうして花丸は寝た。俺は寝れなかったけどね！
次の日の朝、
「雄紀君と花丸ちゃん遅いね、」
「じゃあ千歌が見てくる！」
そして千歌が部屋に入るとそこには、雄紀に抱きついて寝ている花丸がいた。
「な、なにやってるのーー!!!」
千歌の大きな声が家の中に響いた。
「まったく！昨日あんなに言ったのに!!もう!!」
こうして雄紀と昨日のことが気になる花丸が正座して千歌の説教を受けていた。そして昨日のことを教えてもらった花丸は

「なんでとめてくれなかったずらー!!」

また1人の大きな声が家の中で響いていた。

第8話

学校が終わり放課後にちーちゃんから部活に来てと連絡が来たので行くとそこには果南お姉ちゃん達3年生とＡｑｏｕｒｓのみんながいた。
「どうしたの？これ」
曜ちゃんに聞いてみると
「実は果南ちゃん達3年生は前にスクールアイドルをやってたらしくて、」
「でもなんか果南お姉ちゃんと鞠莉お姉ちゃん喧嘩してるような」
「果南ちゃんが歌わなかっただけって言ってるんだけどもしかしたら違う理由があるんじゃないかって」
「なるほど」
そうこうしているうちに果南は部室から出ていってしまった。
雄紀も部室から離れ、果南を追った。
「ねぇ、果南お姉ちゃん」
「どうしたの？今回は雄紀にたのまれてもスクールアイドルはやらないよ。」
「違うくて、本当に歌えなかっただけなの？別な理由があるんじゃ、」

「だからさっきも言ったでしょ、歌えなかっただけだって。」
「嘘でしょ？」
「!?、なんでそう言いきれるの？雄紀は何もしらないでしょ！」
「知ってるよ、鞠莉お姉ちゃんが怪我してたからでしょ？。」
「なんでそれを、、」
「ダイヤお姉ちゃんから聞いたからね。前からなんかおかしいと思ってたから。」
「、、そうなんだ。」
「俺からはこれ以上何も言えないけど、鞠莉お姉ちゃんの考えてることも分かってあげてね。」
これで果南お姉ちゃんも少しは鞠莉お姉ちゃんのこと分かってあげられればいいな。

その日の夜ちーちゃんから3年生のみんながＡｑｏｕｒｓに加入したと連絡が来た。
そして、
「もしもし？雄紀？」
「どうしたの？」

「今日は、ありがとうね」
「いえいえ、俺は果南お姉ちゃん達に喧嘩して欲しくないし、いつでも仲良くしてて欲しいんだよ。」
「そんな恥ずかしいことよく言えるね」
「そうかな、」
「そうだよ、でもそんなふうに思ったことをちゃんと言える人って私は好きだよ。」
「そうなの？」
「そうだよ、雄紀みたいな人は好きだよ、」
「なんか告白されてる感じが、」
「気のせいだよ、」
結構本気だけどね。
「それじゃまたね。おやすみ、雄紀」
「おやすみなさい。果南お姉ちゃん。」

次の日の放課後、
「あの、今週は自分大会あるので、Ａｑｏｕｒｓの練習には参加出来ません。
「なら、みんなで応援に行こうよ！」

ちーちゃんがそう言うとみんなも行きたいと言うことで
「マジですか。」
そうしてみんなで応援に行くことが決まりその日の練習が始まった。
練習が終わったあと、花丸から
「大丈夫ずら?」
「まぁ、大丈夫だよ、」
「無理しちゃだめずらよ?」
「うん。」
「怪我しちゃダメずらよ?」
「大丈夫、大丈夫ただの地区大会だからさ。」
「ならいいけど、」
花丸の嫌な予感が当たるとはまだ誰も知らなかった。

悔しい気持ちとこれから

今日は雄紀の大会の日だ。雄紀は試合上でチームのみんなとアップを始めていた。
Ａｑｏｕｒｓのみんなは観客席から見学をしていた。
「あっ、雄紀君いたよ。」
千歌が見つけるとみんなそっちの方を見ていた。
「本当だぁ。なんかいつもの雄紀君とは全然違うね。」
曜も確認出来たようだ。すると放送で、
「これより開会式を始めます。選手は整列してください。」
そうして選手は皆整列をし開会式が始まった。開会式が終わると、選手は解散してすぐに試合が始まった。
「雄紀はっと、１試合目からからだってよ！」
果南が言うとＡｑｏｕｒｓみんながどこでやっているかを確認していた。そして見つけると、
「いたいた！あれだよ！」
千歌が１番早く見つけたようだ。

そして雄紀は、
はぁ、1試合目からか、まぁとりあえず行けるところまで頑張るかぁ。てか一回目から重量級かよ、大変だなぁ、
「雄紀君あんな大きい相手と戦うの!?」
相手は雄紀よりも身長も体重も大きい相手だった。そして
「初め!」
試合は始まった。相手は左組、雄紀も左組、相四つだった。
おっ、相四つかぁ、だったら楽かなぁ
そうして雄紀は相手を動かしてそこからさらに支釣込足を入れ、相手がバランスを崩した瞬間に背負い投げで相手を投げた。
「1本!それまで!」
「すぐ勝っちゃった。あんなに体格差があったのに。」
ルビィが言うと、
「当然ずら!いつも真剣に練習してる雄紀君が負けるはずないずら!」
花丸はドヤ顔でそういった。
「どうしてそんなに詳しいのかなん?後で説明して欲しいなぁ、」
「それは一緒に沼津にでーt、、はっ!なんでもないずら!それよりまるトイレ行って

くるずら！」

「「「「「「あっ、逃げた。」」」」」」」

「そろそろ雄紀君の2回戦目始まるみたい。」

既に試合上に雄紀は上がっていた。

「初め！」

相手はさっきよりも小さいし力もない。早く終わらせますか、

そして払い越しをかけ、

「技あり！押さえ込み！」

あれっ、1本じゃない。まぁいっか

「技あり、合わせて1本！それまで！」

ふう、無事に準決勝進出か、あと3回勝てば優勝かぁ。最後は前に全国大会に出てた選手か。いやらしい柔道するから気をつけないと。あれ？

試合上から降りるとそこには花丸がいた。

「近くで見たいから来ちゃったずら」

「マジか、でもここは選手と監督くらいしか入れないんだからね？」

「ずらっ!?どうしよう、」

「とりあえず監督に許可状貰ってくるから」

「ごめんなさい。」
「大丈夫だよ、でも次からは気をつけてね。」
「はい」
　試合まではまだ時間があるので監督から許可状を貰って花丸に渡した。
「はいこれ、これ見せれば入れるから。」
「ありがとうずら、そういえば飲み物とかは？」
「ん？いつも自分で持ってるよ？。ほら」
　そうやってみせると
「だったらまるが持つずら！」
「いいの？」
「もちろんずら！」
　そうして花丸と一緒に試合に挑むことになった。
　そして上では、
「あれ!?花丸ちゃん雄紀君と一緒にいるよ!?」
「なんで!?あそこ入れないんでしょ？」
「これは後でちゃんと聞かなきゃね。」

そこには怒っている果南がいた。

そうして準々決勝、準決勝を勝ち抜き最後の決勝まで来た。相手は予想通り全国大会の出場者だった。　　そして

「初め！」

最後の試合が始まった。

組手は喧嘩四つ、自分が左組、相手は右組だった。

うわぁ最後の最後に喧嘩四つか、苦手だなぁ。力も相手の方が上か。

そうして雄紀は相手を動かして1回戦目と同じく支釣込足からの背負い投げで決めようとするが防がれてしまう。そして相手は巴投げを仕掛けてきた。

あっぶな、

そしてそこから関節を狙ってきた。そのまま関節技は決まってしまった。なんとか抜け出せたものの、利き手の左手を痛めてしまった。

くっそ、関節まで狙ってくるとは思ってなかった。左手はまだ動くけどあんまり無茶は出来ないなぁ。

やっぱりさっきの技で左手痛めてたんだ。大丈夫かな。頑張ってね雄紀君。

花丸は応援することしか出来なかった。

試合が始まって3分半が経過した時、雄紀はゴールデンスコアまで入ると思い、でき

るだけ体力を温存させていた。その時、相手は急に雄紀に背負い投げをしてきた。しかし普通の背負いではなかった。わざと頭から落ちるように投げたのだ、雄紀は何も出来ず頭から畳に落ちてしまった。そしてまた左手に関節技を決めたのだ。

審判はすぐに試合を止め、副審判と話し合い相手は反則負けとなった。

そして雄紀はそのまま病院に運ばれた。試合は雄紀が優勝という結果になった。

花丸は雄紀と一緒に病院に行った。そしてあとからＡｑｏｕｒｓも病院に着き、花丸と合流したが、

「雄紀君どうなの？」

梨子が花丸に聞くと、

「病院の先生が、もしかしたらもう柔道は出来ないかもって、、言ってました。」

「うそ、、その話は本当？」

果南が聞くと

「はい、左腕の怪我は手術で治るけど、脳のダメージが酷いからもしかすると麻痺だけではなく記憶も危ないと。」

検査の結果左腕のひじ靱帯断裂と、脳のダメージによる左手の麻痺だった。

「まるがサポートするって言ったのに、何もできなかった。」

「大丈夫だよ！花丸ちゃんのせいじゃないよ！」

千歌が花丸を励ますが、
「でも雄紀君は怪我をして柔道が続けられなくなるかもしれないんです！」
「それは、、」
「ごめんなさい。ちょっと1人にさせてください。」
そう言うとまるは病院をでていってしまった。
「花丸ちゃん、自分のこと責め過ぎなければいいけど。」
曜がそう言うと、
「とりあえず雄紀君が手術終わって起きるまでは私達は何も出来ないからここで解散で、」
千歌がそういい、Ａｑｏｕｒｓのメンバーは各自の家に帰った。

これからの目標

　手術が終わり目が覚めた後、雄紀は病院の先生から話を聞いていた。
「今回手術により腕の怪我はなんとかなりますが、腕は動きますか？」
「動かないですね、」
「やはり、その件については今はどうしようもない状況です。時間経過でもしかしたら治るかもしれない。しかし確率は０に近いです。柔道は諦めた方がいいかもしれませんね。」
「、、、わかりました。」
「すいません。私の力不足です。」
「いや、先生は悪くありませんよ。」
　そうして雄紀はまた病室に戻った。戻ってから少しすると
　コンコン
「はーい。」
「お姉ちゃんですよー」
「鍵かかってないから入れるよ。」

そして早苗お姉ちゃんが

「大丈夫？」

「大丈夫だよー。ちょっと腕が動かないだけ。」

「それは先生から聞いてたけどさ、まぁ元気なら大丈夫だね。」

「うん」

「それと外にあなたの大好きな花丸ちゃんがいるから」

「えっ、」

「ずらっ!?」

「それじゃ、私はこれで」

そう言って出て行った早苗お姉ちゃんと入れ替わりで花丸がやってきた。

早苗ｓｉｄｅ

「みんな花丸ちゃんの友達でしょ？まぁ果南と鞠莉とダイヤは知ってるけどね。」

「「「「「「「はい」」」」」」」

「今病室に花丸ちゃんがいるから。なんか様子おかしかったし。だからちょっとだけ待ってあげてね」

そう言って早苗お姉ちゃんは帰って行った。

雄紀ｓｉｄｅ

「さっきの早苗お姉ちゃんのことは気にするな。」
「うん。それでどうなの？」
「何が？」
「怪我したところ。」
「すぐ治るってよ。」
「本当ずら？」
「うん、」
「嘘ついてない？マルの目見ていえる？」
「う、うん」
「嘘が下手ずら。見てないずらよ。」
「はい、」
「腕はどうなの？。」
「えっと、まぁすぐに「本当のこと言うずら！」」

「、、、怪我は治るんだけど、腕が動かないです。」
花丸はそれを聞いて涙が止まらなくなっていた。

「やっぱり、マルのせいで、」
「違うから、花丸のせいじゃ無いよ。」
「でも決勝前に邪魔してサポートするって言ったのに何もできなくて、」
「この怪我は俺の不注意が原因だから！花丸のせいじゃ無いよ」
「でも、」
「でもじゃなくて、とりあえず花丸は悪くない。いいね？これ以上自分のこと責めちゃだめだよ！」
「わかったずら。」
　花丸の手首の包帯の色が赤いことに気づいた
「1つ聞いていいかな。」
「何ずら？」
「なんで腕に包帯なんて付けてるの？怪我でもしたの？」
「何もしてないずら。」
「じゃあなんでつけてるのさ。」
「それは、」
「花丸、リストカットしたでしょ。」
「!?そんなことしてないずらよ、」

「じゃあなんで包帯に血がついてるの？」
「、、、」
「全く、アイドルなんだから傷付けたらダメでしょう。あと、次やったら許さないからね。」
「ご、ごめんなさい。」
「しかも昨日寝てないでしょ、こっちで寝なよ。」
「さすがにそんなことできないずら」
「いいから」
「、、わかったずら」
　そうして花丸はすぐ寝てしまった。
「やっぱり、」
　そしてまた
　コンコン
「はい？」
「こんにちは。雄紀君大丈、夫？」
　Ａｑｏｕｒｓのみんなが来たがあまり見られたくはなかった。
「これは花丸が眠いそうだったから。」

「また雄紀には説明してもらうことが増えたね。」
　果南お姉ちゃんがニコニコして言ってきた。なんか黒いオーラが
「それで？怪我はどう？」
「怪我は治りますけど、動かないんです。」
「やっぱり花丸ちゃんが言ってた通りに。」
「まぁ、もう柔道はやらないんで。」
「「「「「「えっ、」」」」」」
「実はそんなに好きでは無いので。」
「けど、」
　千歌が言うと
「いいんだよ、もう疲れたし。」
「とりあえずみんな来てくれてありがとうね。こんな暗い話なんてもう終わりにしようよ。俺は大丈夫だし」
　そう言って話を終わらせようとした時花丸のスマホが鳴った。
「花丸ちゃんのスマホなってるね、あっすぐ切れちゃった。後で花丸ちゃんにおし、、、」
　どうしたの？ルビィちゃ、、、」

花丸のスマホには花丸の太ももであろう上に頭を乗せて寝ている雄紀の写真が、」
「何これ!?いつ撮ったの?俺知らないんだけど!」
「いやー雄紀が退院したら楽しみだなぁ。全部話してもらえるよねぇ、」
「いや、それは、「ねぇ?話すよね」話します!」
この時の果南は誰にも止められなかった。

夏のお手伝い

果南達に説明をしてなんとか納得してもらったが花丸は起きないし、大変だった。
一応病院の先生からは退院をしてもいいと言われた。まぁ、腕は固定したままだけどね。退院の日は花丸が手伝ってくれた。
「まるが手伝うずら、片手では厳しいでしょ?」
「じゃあお願いするね。」
「まかせるずら!」
そうして片付けは終わり雄紀と花丸は雄紀の家に向かった。手伝ってくれたからお茶でも飲んでいくかと聞いたがすぐに帰ってしまった。
「はぁ、とりあえず寝るかぁ。なんか物凄い疲れた。」
そうしてそのまま眠りについた
あれ、なんか柔らかいものが、こんなのベットにあったっけ
そうして目をあけると、
「、、、、、」
「、、、、、」

　そこには顔を真っ赤にした果南お姉ちゃんが、
「、、、疲れてるんだな。もう1回寝るか」
「おいこら、何胸揉んでまた寝ようとしてるの？」
「あれ？夢じゃない？」
「夢じゃないよ、現実だよ。てかそろそろ離してもらえるとものすごい嬉しいんだけど。」
「ご、ごめん！」
「まったく、それで？」
「えっ、あぁ、柔らかかったです。」
「はっ倒すよ、」
「ごめんなさい。」
「それで？なんでみんなの電話に出なかったの？」
「うそ、電話来てた？。」
「確認してみたら？」
　そうして確認してみると、たくさんの着信があった。特に花丸と果南が多かった。後千歌もかな。
「ごめん、迷惑かけて」

「別にいいよ、そういえば帰ってきてからなんか食べた？」
「いや、何も食べてない。」
「やっぱり、じゃあなんか作ってあげるから待ってて。」
「いいよ、後で作って食べるから。」
「どうせ作らないでしょ、てか片手でどうやって作るのさ、」
「あ、そうだった。」
「いいから、座って待ってて。」
「はい」
　そうして座ってまってると、
「お待たせ、とりあえず冷蔵庫にあったもので作ったからこれしか出来なかったけど」
　作ってくれたのはチャーハンだった。そういえば冷蔵庫あまり入ってなかったなぁ。
「ありがとう、果南お姉ちゃん。」
「冷める前に食べちゃいな。」
「うん、いただきます。」
「どう？」
「美味しいよ！」
「良かったぁ、あまりチャーハン作らないからね、成功してよかったよ。」

　そうして食べ終わったあと
「あ、あのさ」
「うん？」
「花丸のさ、スマホに雄紀写ってたじゃん。」
「うん、」
「だから私も雄紀の写真取りたいなぁと」
「あー、いいよじゃあ一緒に撮る？」
「いいの!?」
「果南お姉ちゃんがいいなら俺はいいよ。」
「やったぁ！」
　そうして写真を撮ったあと
「じゃあそろそろ帰るね。今日はありがとうね。いろいろと」
「ごめんね、ご飯まで作ってもらって。」
「いやいや大丈夫だよ、あっそう言えば、」
「うん？」
「明日の朝に海岸に集合だって、千歌からの伝言だよ」
「はーい、」

そう言って果南と別れた。

夏のお手伝い２

「んっ、、」
（今日は海の家のお手伝いがあるからな、そろそろ起きないと。）
「なんか、、いる？」
　布団をどかしてみると、梨子がいた。
（あれ？なんでここに梨子さんが？しかも普通に寝てる。昨日何かあったっけ。思い出せ、思い出すんだ）
　すると
　ガチャ、
「梨子ちゃーん。雄紀君おき、、た？」
「お、おはようちーちゃん。今日もいい天気だな！」
「なんで梨子ちゃんが雄紀君のベットで寝てるの！どういうこと!?」
「待ってくれちーちゃん！俺が起きた時にはこうなってたんだ！」
　すると、
「う～ん、うるさいよ～千歌ちゃん。、、あれ？なんでここに。てか雄紀君!?えっ？えっ

？」

梨子が目覚めるとだんだんと思い出して来たようで、

「ごめんなさい。起こそうとしたんだけど気持ちよさそうに寝ててそれ見てたら私も眠くなっちゃって、」

「まったく、ダメだよ！勝手に布団の中に入ったりしちゃ！」

「はい」

千歌に怒られながらリビングに行くとＡｑｏｕｒｓみんながいた。梨子は花丸と果南に連れていかれてたが何かあったのだろうか。

今回の罰としてみんなの朝食を作ることになった。

「ルビィ、手伝います！」

「じゃあルビィちゃんは箸とか持って行ってもらってもいいかな。あと盛り付けた料理も」

「わかりました！」

「私も手伝うよ！」

「ごめんね曜ちゃん。やっぱり片手だけだと厳しくてね。料理任せてもいいかな。」

「了解！」

そうしてなんとか作り終わり、みんなで朝食を食べ、海の家に行った。

「雄紀君、鼻血でてるずらよ、」
「すまないね。あんなもの見せられるとね。」
「やっぱりスケベずら」
「じゃあそろそろお手伝いに行こうか。」
「あっ、話変えたずら」
　だって、ねぇ、みんなのスタイルが凄すぎて
「それにしても、隣のお店にお客さん行ってるねぇ、」
「何呑気なこと言ってるんですの!!このままでは手伝いに来たのになんの意味もないですわ！」
　おー、ダイヤお姉ちゃんが焦っている。ん？善子ちゃんと鞠莉ちゃんと曜ちゃんは料理か、俺も怪我なければ手伝えたんだけどなぁ。他はチラシ配りかな？俺もそっち手伝うか。
　そうしてなんとか海の家のお手伝いが終わった。曜ちゃんが作ったヨキソバはほとんど売れたが、堕天使の涙、シャイ煮は売れていないようで残っていた。
「ほらー、1人以外疲れてると思うけどみんな頑張れー」
「それは、いったい誰のことかなん？」
「あはは、、」

「後で来なさい。」
「最近呼ぶの多すぎじゃ、「いいからきなさい。」はい」
　練習も終わり、みんな体についた砂を落としていた。ちーちゃんは美渡姉に呼ばれてたな。
「Ｉ，ｍ　Ｈｕｎｇｒｙ、ご飯まだ？」
「それが、、、」
「うん、分かってた。俺は分かってたよ。」
「申し訳ない！」
「デエス！」
「まぁまぁ、とりあえず食べてみようよ。とりあえず鞠莉お姉ちゃんのシャイ煮から、」
「うまいずら！」
「ほんとだ、美味い」
　ものすごく美味しかった。なぜ美味しいのかは分からないけど。
「じゃあ次は堕天使の涙をっと」
　すると
「ピギィィィィィ!!、」
「えっ？」

「善子さん!!一体何を入れたんですの!!」
「タコのかわりにタバスコを、、」
「おおー、結構好きだわ。」
「えっ、本当？」
「うん。美味しいよ、でも辛いの苦手な人は厳しいかなぁ。俺は大丈夫だけど。」
なんか善子ちゃんがものすごく嬉しそう。
そして
「じゃあ俺はそろそろ帰るよ。」
「ちょっと待って、雄紀君。」
「どうしたんですか？美渡さん。」
「えっとね？今日うち結構混んでて９人厳しいからそっちに泊めてもらってもいい？」
「マジですか、」
「ごめんね」
「まぁ、自分はいいですけど、彼女達がどうするかは」
「それなら大丈夫。みんな喜んでたから。」
後ろを見るといつの間に荷物を持ってきたのか分からないけど準備が整ってるみんながいた。

「、、、分かりました。」
「ありがとうね。今度お風呂に入れさせてあげるよ。」
「はい」
そうしてまたみんなで家に来ることになった。

お泊まり会1

「それじゃあ後はよろしくねー」
　そう言って美渡さんは中に戻って行った
「じゃあ俺の家に行きますか、」
　全員「おー！」
「とりあえずお風呂入ってきなよ。俺は布団の用意しておくから。」
　全員「はーい」
「やっぱり片手でやるのはきついなぁ、」
「手伝うずら？」
「花丸、お風呂は？」
「お風呂大きいから今2人ずつ入ってるずら、今することないから来ただけだよ。」
「そっかぁ、」
　そうして布団の用意が終わりリビングで休んでいたら、
「今からなにかしない？」
　鞠莉からの提案だった。この時雄紀は嫌な予感がしていた。

「トランプとか？」
「そういうのもいいけどもっとスリリングのあるものがいいわねぇ。」
「そう言えば私たち3年生がＡｑｏｕｒｓに入る前に雄紀さんの家で王様ゲームをやったとルビィから聞きましたわ。」
「それいいわね！じゃあみんなやりましょ！ルールはなんでもありでＲ―１５辺りまでなら許すわ！」
「マジかよ。」
　雄紀の嫌な予感が当たってしまった。そして他のメンバーはやる気が凄かった。まだ俺風呂はいってないんだけど。
「じゃあ始めるわね？王様だーれだ!!」
　１回戦、王様を引いたのは、
「あっ、わたくしですわね。」
　一回目はダイヤお姉ちゃんだった。なら安心だ。
「では、３番の方は今度私の仕事の手伝いを頼みますわ」
「あっ、私です。」
　選ばれたのは梨子でした。まぁ梨子なら大丈夫だろう。
「じゃあ今度お願いしますわね。」

「分かりました。」
「じゃあ2回目ね！王様だーれだ!!」
「マリーの番のようね！」
　うわぁ、また嫌な予感が、、、
「じゃあ4番と7番はマリーの前でキスして？」
「「えっ、」」
　選ばれたのは雄紀と果南だった。
「鞠莉、それはダメじゃないかな？」
　果南が言ってみるも
「王様はの言ったことは絶対よ？」
「後で覚えておきなよ」
「鞠莉お姉ちゃん、口じゃなくてもいいよね？」
「いいわよ？さすがに口でやれとは言わないわ」
「分かったよ。果南お姉ちゃん、俺からやるからじっとしてて。早く終わらせちゃうからね。」
「うぅー、分かったよ。」
「じゃあいくよ？」

「うん」
チュッ、
そして雄紀は果南のほっぺにキスをした。
「はい、終わり。次進めよ?」
「分かったわ!次行くわよ〜!!」
鞠莉お姉ちゃんは満足したようだ。けどさっきから黒いオーラを出しているのが3人ほど
(なんかものすごい嫌な感じずら、こんな気持ちダメなのに。)
ものすごくイライラするずら、、
(なんで雄紀くん果南ちゃんとキスしてるの?なんで私じゃないの?)
そんなの千歌許さないよ?
(雄紀お兄ちゃんが、果南さんとキスするなんて嫌。なんでしちゃったの?)
雄紀お兄ちゃんはルビィだけのものだよ?
そんなことを知らずに王様ゲームは進んで行った。

お泊まり会その２

「じゃあ続きやりますか、残り3回位で終わりでいいかな？そろそろ寝る時間だし」
　全員「はーい」
「王様だーれだ！」
「ククク、ついに私の出番ね!!　じゃあ、８の人は今度私の用事に付き合ってもらうわよ!!」
「うわっ、また俺かよ。」
「うわってなによ！」
「別に善子と一緒にいるのが嫌なわけじゃないから安心しろ」
「ならいいけど、」
（よしこちゃん？何さりげなく約束してるずら？なんで顔赤くなってるずら？
　いくらよしこちゃんでも許さないずらよ？）
「おーい花丸、なんかおかしいぞ？それにルビィとちーちゃんまで。体調悪いならやめるか？」
「大丈夫ずら、まだ終わる訳にはいかないずら」

「大丈夫だよ雄紀お兄ちゃん。」
「雄紀くんは何もしなくていいよ。」
「は、はい」
「早く次にいくずら」
「じゃあ次行きましょうか、王様だーれだ！」
「やったー！千歌の番だよ！」
（千歌ちゃんが先に引いたずら!?まずい、このままじゃ）
「じゃあね7番の人は千歌と一緒に遊んでもらうよ！まだ予定は決めてないけど!!」
「えっ、また俺？」
（ふふふ、さっきチラッと番号が見えてたからね。）
「ダメ？」
「いや大丈夫だよ」
「やった！約束だよ？」
「はいはい、約束は守るから次行くぞー」
やっぱり千歌ちゃん番号みてたずら。次で最後だからここで引かないと！
全員「王様だーれだ！」
「お、最後に俺か。ラッキーだな」

（残念、最後もまるじゃなかったずら。でももしかしたら）
「うーん、あっ、鞠莉お姉ちゃん番号じゃなくて名前で指名してもいい？」
「本当はダメだけど今回だけ許すわ」
「ありがとー、じゃあ鞠莉お姉ちゃん後で大事な話あるんだけど聞いてくれないかな。」
「分かったわ。このゲームが終わったら話しましょ？」
「ありがと、じゃあ終わりにするかぁ。」

「それで？話ってなんなの？」
「あぁ、その事なんだけどな」
説明中

「なるほど、大体のことは分かったわ。それにしても雄紀がねー、」
「前から好きだったんだ。でもいつ言えばいいか分からなくてさ。」
「さっき教えたことを守れば大丈夫よ！」
「ありがとうね。鞠莉お姉ちゃん」
「じゃあ頑張ってねー。失敗したら私のとこに来てもいいのよ？」
「失敗しても行かないけどね」

花丸視点

「寝る前に少し外のに行こうかな。」

花丸が外に行くとそこには雄紀と鞠莉がいた。

「そういえばなんの話してるんだろう。」

すると

「前から好きだったんだ」

「えっ?、前から好きだった、、鞠莉ちゃんの事が?」

やっぱりさっきのは告白するためだったんだ。

花丸はすぐに家に戻り寝てしまった。

雄紀視点

「あれ、花丸は?」

「なんか体調悪いからすぐ寝るって」

「ふーん、ありがとう、教えてくれて」

「別にいいわよそれくらい」

雄紀は花丸の気持ちにまだ気づいていないままだった